

令和 2 年 5 月 30 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02315

研究課題名(和文) 仏像の聖性を保証する像内納入品の機能に関する研究

研究課題名(英文) Study on function of the sotored goods to guarantee the holiness of the Buddha statue

研究代表者

佐々木 守俊 (SASAKI, MORITOSHI)

岡山大学・社会文化科学研究科・教授

研究者番号：00713885

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：仏像の像内納入品のうち心月輪と小仏像をとりあげ、それらの納入が定着する経緯と、納入によって仏像の聖性がいかに保証されたかを研究した。方法は実作例の調査とともに、これまで活用されてこなかった経典や寺社縁起などの記載の網羅的な収集に力点を置いた。さらに、それらの情報を分析することで、心月輪や小仏像を像内に持つ仏像がどのような存在として認識されていたかを考察した。その結果、心月輪と小仏像の納入は従来知られていた以上に中国的な信仰を色濃く反映していたことが判明し、可視の仏像とその内部に秘匿された不可視の仏性を対照し、仏身を二重構造を持つ存在と位置づける目的で納入がおこなわれたとの見通しも立てられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

像内納入の行為を「仏像への聖性の付与」と理解する観点に立ち、特に満月をかたどった円盤である心月輪と小仏像の納入の歴史的・宗教的意義を美術史的な研究方法によって考察した。心月輪は「ほとけの魂」との理解の当否や密教儀礼の中での機能が問われてきたが、本研究では「心月輪を籠めるほとけのイメージ」の受容と展開をあとづけ、仏像を人工物と認めつつも仏性の存在を保証する手段として納入がおこなわれたとの見通しを示した。同様に小仏像の納入も、内外の二重構造によって仏像の仏性を保証する信仰が根底にあることを明らかにし、「胎内仏」に対して「鞘仏」を副次的な存在とする認識には再考の余地があることを示した。

研究成果の概要(英文)：This study took up the moon disk and small Buddha statue stored in the inside of the Buddha statue, and examined how the process that the custom took root in and the holiness of the Buddha statue was guaranteed. The method established an important point for the investigation into works(Buddha statues, stored goods), and Exhaustive collecting mentions written in the sutras and the legends of the Buddhist temple and Shinto shrine which have not been utilized so far. Through analyzing those information, this study examined how the Buddha statue like that were recognized.

As a result, the fact that storing of the moon deisk and small Buddha statue reflected Chinese faith more heavily than it was known conventionally was understood. And the prediction was in sight that they were stored for the purpose of comparing a visible Buddha statue with the concealed invisible Buddha-nature in that and of considering a Buddha's body to have dual structure.

研究分野：美術史

キーワード：像内納入品 仏性 寺社縁起 造像銘記 胎内仏 破損仏 心月輪 聖性

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 仏像の像内納入品は早くから彫刻史研究者に注目され、仏像に聖性を付与するものと、ほとけと人が接点を持つためのものに大別されることが明らかにされてきた。小仏像と心月輪は前者に分類されるが、心月輪は「ほとけの魂」とされるいっぽう、納入の意義については議論の余地を残していた。小仏像の納入については、由緒ある「胎内仏」を守る「鞆仏」との理解が一般的で、納入の積極的な理由は長らく検証されてこなかった。しかし、1990年代以降、奥健夫氏の諸論考に代表される、像内納入全般に関するより具体的・実証的な研究が相次ぎ、心月輪と小仏像の納入についても見直しが迫られる時期が到来していた。

(2) 報告者は本研究以前に、印仏・摺仏と呼ばれる仏教版画をおもな対象とし、説話史料を積極的に活用して像内納入品研究を進めてきた。その過程で、像内納入の信仰は仏像、さらにはほとけの存在意義に対する社会的認識を如実に反映するもので、歴史学や文学、宗教学などの隣接分野にとっても看過できない問題であること、これらの分野の研究動向にも目配りすることで本質的な議論を展開できるとの確信に至った。そのうえで、「仏像には何が期待されていたのか、仏像はどうあるべきと思われていたのか」という大きな問題にアプローチするには、心月輪と小仏像の納入を中心に検証を進めることが有効と考え、本研究を開始した。

### 2. 研究の目的

心月輪や小仏像が納入された平安・鎌倉時代の仏像を考察対象とし、像内納入の本質的な意義を検証することを本研究の目的とした。心月輪や小仏像の納入は、人工物である仏像にほとけとしての性質(仏性)を保証する行為と考えられている。納入の思想的背景の解明は、制作当時における仏像の存在意義を知るうえで有益だが、従来の研究では具体的な理解には至っていなかった。本研究では、作品を詳細に観察するとともに、あまり注目されてこなかった文字史料や絵画史料も網羅的に収集し、作品と史料から得られた知見を照合することで、仏像の聖性を保証する納入品の機能を検証した。

### 3. 研究の方法

(1) 仏像本体と納入された小仏像および心月輪を実査し、基礎的なデータを収集・整理した。

(2) 関連する絵画史料や、経典・日記・寺院史料・説話などの文字史料を収集・整理した。特に、従来はあまり注目されなかった史料を集中的に検証した。

(3) 作品調査の結果と文字史料から得られた知見を照合することで、仏像の聖性を決定する納入品の機能を検証した。さらに、小仏像を納入する場合と心月輪を納入する場合の信仰背景の異同を明らかにする試みをおこなった。

### 4. 研究成果

(1) 心月輪の納入については、重要な情報群であると予測していた密教図像や仏画などの絵画史料に新知見を見出すことができず、研究方法の修正を余儀なくされた。いっぽう、本研究申請後、平安時代末期から鎌倉時代初頭の仏像観を知るうえで重要な史料である国立歴史民俗博物館本『転法輪鈔』が公刊されたほか、中国五代の『宗鏡録』を手がかりに清涼寺釈迦如来立像に納入された鏡像の宗教的意義を読み解く柳幹康氏の論考が発表され、像内納入品研究にとって有益な情報を多く入手することができた。また、本来は心月輪研究の観点から執筆されたわけではないにもかかわらず、実は非常に重要な論点を提示している内藤榮氏と北尾隆心氏の論考の存在を知り得、密教儀礼における心月輪の意義を再考することが可能となった。加えて、『宋高僧伝』などにも心月輪の納入に通じる記載が見出された。従来、中国文化受容の観点から心月輪の納入を理解する研究は清涼寺釈迦如来立像と納入品の鏡像の存在を基点としてきたが、文字史料を通じてのアプローチも有効であると期待される。

報告者は本研究の最終年度までに心月輪の納入に関する論考を査読誌に投稿することを目標としていたが、収集した情報が多岐にわたり、その整理と考察にはまだ時間が必要との判断から投稿を見送った。しかし、心月輪研究を通じて小仏像の納入の研究にも応用可能な情報を多く集めることができ、ひとまず一連の研究を総括しうる段階に達したため、まずはこちらについて2篇の論考を完成した。今後は心月輪納入に関する新知見を可能な限り早い時期にまとめ、公刊を目指す予定である。

(2) 小仏像の納入については、本研究開始以前から『文殊師利般涅槃経』にみえる、丈六の文殊菩薩の胸中に六尺の「真金像」が存在するとの記述に注目し、ほとけの身体が二重構造を持つとの認識と小仏像納入の関係を考察してきた。その結果、像内の小仏像を仏性=法身、仏像を生身とする認識の重要性に思い至ったが、同様の指摘がすでに長岡龍作氏によってなされていること、本地垂迹思想との関連も注意すべきであることに気づいた。そこで、長岡氏の論考を前提に、12世紀の基準作である法隆寺聖霊院聖徳太子坐像を研究対象とし、生身像としての性格を濃厚に示す太子像の内部空間に本地仏である救世観音立像が存在することの意義を考察した。その結果、物故者の霊をまつる聖霊院という場において、11世紀以来太子に期待されてきた生

身性と、救世観音としての普遍性・永遠を兼ね備える存在として法隆寺像が企図されたとの見解に到達した。本論考は本報告書作成時点では未刊だが、板倉聖哲・高岸輝編『日本美術のつくり方』に収録される予定である。

(3) 法隆寺聖霊院像に関する論考の執筆と並行し、平安・鎌倉時代の小仏像の納入に関する史料を可能な限り収集し、納入の全体像を把握するとともに、信仰基盤の解明に努めた。これまでに注目されてきた史料は限られていたが、『法華山寺縁起』などの寺社縁起、『兵範記』などの日記類、そして各種の造像銘記に視野を広げることで、本研究開始当初には念頭になかった立脚点を多数見出すことができた。

『法華山寺縁起』は鎌倉時代の天台僧である慶政の著作で、由緒ある霊像を納入した事例とともに、内外の像が同時の制作である事例も記載されており、既存の「胎内仏」を「鞘仏」に納入する行為が小仏像納入の主要なありかたであるとの見方に大きな疑義を呈する史料として重要性が高いことが判明した。これは、内外の像がほぼ同時代である例、もしくは小像を新規に制作して既存の像に納入する例が少なからず存在している実状と合致する。また、『兵範記』にみられる生身像の納入に関する記載は、寺社縁起研究では注目されてきたものの、像内納入品論の観点からは言及された形跡がなく、12世紀中葉の像内納入に関する史料として美術史研究の俎上に乗せることの必要性を指摘した。その他、『石間寺縁起』『当麻寺流記』などの諸史料、そして実作例と造像銘記を包括的に検証することで、納入品とされる小仏像は非常に多くの場合金銅製または檀木製とされていること、火災から自力で脱出するなどの能動的なエピソードが尊崇の源泉とされていることなど、共通する傾向を見出すことができた。

火災からの脱出に関連して想起されるのが破損仏の納入である。これも従来は痛ましい姿を隠すとともに由緒ある古像を保存するという側面が注目されてきた。だが、焼け残った根本像の一部を納入する仁和寺薬師如来坐像に関する言及や、観世音寺不空羂索観音菩薩立像の銘文など、火災からの救済を称賛する史料が多く残っていることを勘察し、単なる秘匿や保存を超えた宗教的意義が期待されての行為とみなせることを指摘した。小仏像や破損仏の納入には、従来の認識どおり副次的な「鞘仏」として外部の像を制作したことが確実な例も知られているが、それのみならず、内外の像を一体として霊像とみなす認識が存在したことも確実で、この事実は中世の仏像観への見直しを迫るものである。

以上の考察は最終年度末に報告書『仏像の聖性を保証する像内納入品の機能に関する研究』として公表した。ただし、本書は既存の霊像や破損仏の納入に関する研究を中心としている。新規に小仏像を制作して納入品とする事例については、さらに情報収集の可能性が期待されるので、近日中の成果公開をめざすこととする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 増記 隆介、皿井 舞、佐々木 守俊	4. 発行年 2018年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 238
3. 書名 天皇の美術史 1 古代国家と仏教美術	

1. 著者名 佐々木守俊	4. 発行年 2020年
2. 出版社 佐々木守俊（科研報告書）	5. 総ページ数 34
3. 書名 仏像の聖性を保証する像内納入品の機能に関する研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----